

傷口を広げにいくよ流れ星

吉沢 美香 宮城県

始まる瞬間から、もう傷は始まっている。美しいほどに無傷でいることなどできないのだ。けれど、それをわかっていても来てくれるなら、どんなに傷を広げられてもいい。「広げにいくよ」という声かけは、傷つけない、と言われるよりも愛を感じる。

記憶で顔は鼻や睫毛をうしなうて

その間隙をうめていく雪

辻村陽翔 北海道

記憶は徐々に形を失っていく。顔にも崩れて思い出せなくなる順があつて、見つめあった眼や触れた唇も、いつか分からなくなる。そこを雪が埋めていくなんて。けれど、いつか雪は溶け、すべてを思い出せなくなったあとに、花はきつと咲いてくれる。

歯ブラシを岸に残して

死に顔と寝顔を隔てる川を泳ぐ

常田 瑛子 山口県

睡眠は死との境界線が淡くなる。私が私を見えなくなり、私以外も見えなくなる。何を以て今の生を信じるのか。「歯ブラシ」という寝際に触れたであろうものが、淡い空間の中で自分を帰らせる場所への縁となる。残してきたものが、ほのかに光っている。

心音が消えればうかぶブイがある

桜庭 紀子 和歌山県

海は広い。どこか、人がまだたどり着けていないところに、この世の命と呼応する空間があるかもしれない。命が役目を終えたときポコリと浮かび上がるブイ。果てが見えないと

ころまで浮かぶ膨大なブイが波に揺られている。何かの皮膚が息づいているようにも見えない。

透明な母親を売る市がある

桜庭 紀子 和歌山県

人が透明になるとき、自分の意志だけではそうはならない。周りからそのように扱われ、少しずつ自分で自分を見失い認知できなくなっていくのだ。家の中でそのように扱われ「透明な母親」になっていき、売られる最後。透明になり見えなくても俯いた昏い眼差しを感じる。

触れあって針葉樹林だと気づく

飛和 長野県

触れてしまったら、戻れない。戻れないのだ。たとえそれが針葉樹林であっても。冷帯に生育する針葉樹林。どんなにあなたの傍にいても、冷たく痛い。けれど主体は、おそらくこの後も触れ続けるだろう。目の前の事実を他人事のように見つめながら。

ひよいと寄り

冬日ゆずってくれるひと

深町 明 福岡県

穏やかな幸福の中にのみ滲む淋しさがある。自分の得を手放し、相手に温かさを譲る人という主体。あたたかい、なのに、哀しい。愛はときに人を淋しくさせる。相手のことを愛していればいるほどに。淡々とした語りがその心を際立たせる。

勝ち逃げが骨壺に居て冬の雨

澤井 和水 東京都

死とは、終わりでもあり、けれど解放でもあり。主体は、本当はもっとたくさんのことを

骨になる前に言いたかったのだろう。言えない、言ったとて自分にそっくりそのまま跳ね返ってくるのみ。勝ち逃げという言葉さえも。けれど、生きていても同じだったのではとも思う。

ポタージュが満ちて

輪廻の果ての朝

飛和 長野県

ポタージュが器に満たされる。幸せな瞬間だ。すべて自分が飲んでもいい、自分だけのポタージュが目のある朝。生き続ける、というのはふとした瞬間にぐらつく。私はまじりつけなしの私なのか、目の前にあるものは、本当に私だけのものなのか。輪廻が繰り返された魂に幾重にもかかる命ごとの「私」がいる。

体温を知ったら負けよあつぶつぶ

檜野 美果子 宮城県

苦しいことほどふざけていけば、大丈夫な気がしてしまう。許されぬ恋なのかもしれない。体温を知ってはいけけないなんて。遊びのように、いつでも終われるように、傍にいない。「負けよ」という語りかけや「あつぶつぶ」の軽やかさが心との裏腹さを描く。